

が、これらのサイトカインは HPS の病態形成にも関与するとされ、本例における HPS 発症との関連が示唆される。

II. 特 別 講 演

「慢性炎症と悪性リンパ腫」

大阪大学医学部 病理病態学教授
青 笹 克 之 先生

第56回新潟癌治療研究会

日 時 平成10年2月21日(土)
午後1時30分より6時15分まで
会 場 新潟東映ホテル
1F 白鳥の間

I. 一 般 演 題

1) 口腔扁平上皮癌における PTHrP 発現と骨シンチグラム所見の関係

亀田 綾子・土持 眞 (日本歯科大学
新潟歯学部歯科
放射線学教室)
佐藤るみ子・原田美樹子 (同 第二
口腔外科学教室)
和田 真一 (同
口腔病理学教室)
岡田 康男 (同
口腔病理学教室)
片桐 正隆 (同
口腔病理学教室)

【目的】口腔扁平上皮癌顎骨浸潤と副甲状腺ホルモン関連ペプチド(PTHrP)の関係を明らかにするため骨シンチグラフィと PTHrP immunohistochemistry を行い検討した。また血清 PTHrP 濃度との関係も検討した。【方法】口腔扁平上皮癌54例の血清 C-PTHrP 値を測定した。初診時生検組織の PTHrP immunohistochemistry (LSAB 組)を抗 PTHrP (38-64) monoclonal 抗体と(1-34) polyclonal 抗体を用いて53例に行った。また、骨シンチグラフィを行っている48例の^{99m}Tc-MDP 集積状態も観察した。

【結果】^{99m}Tc-MDP の集積の有無による平均血清 C-PTHrP 値の有意差は見られなかった。また癌組織内発現との関係もないようであった。【結論】扁平上皮癌顎骨浸潤と腫瘍内 PTHrP 発現、血清 PTHrP 濃度との関連は認められなかった。

2) 尋常性天疱瘡経過中に発症した口腔粘膜多発癌の一例

小林英三郎・森 和久 (日本歯科大学
新潟歯学部口腔外
科学教室第2講座)
又賀 泉

尋常性天疱瘡の経過観察中に口腔粘膜多発癌を発症した一症例を経験した。

症例は63歳、女性。初診：1986年12月3日。既往歴：6年前より高血圧症に対し降圧剤内服中。現病歴：約4年前より口腔粘膜に疼痛を自覚し、近医にて局所治療を受けるも改善せず、当科に紹介来院した。現症：全身皮膚には異常を認めず、口腔粘膜広範にびらん性病変を認めた。処置および経過：口腔粘膜の生検結果は尋常性天疱瘡で、PSL 投与により症状は一進一退であったが、初診より約7年後、上顎歯肉および頬粘膜の3箇所に腫瘤を認めた。切除組織診断はそれぞれ扁平上皮癌、疣贅癌、上皮内癌であった。さらに天疱瘡に対しては DDS を投与し、経過良好であったが、その後1年4か月、下顎歯肉に増殖性変化を認め、切除組織診断は epithelial dysplasia であった。約2年後の現在、口腔内に腫瘍は認めず、嚴重に経過観察中である。

3) 舌と食道の重複癌5症例の臨床的検討

高田 真仁・芳澤 享子 (新潟大学歯学部
野村 務・新垣 晋 (口腔外科学
中島 民雄 (第一講座))

舌と食道の重複癌患者5例について臨床的検討を行った。過去10年間の口腔扁平上皮癌一次症例は106例で、舌癌は45例(42.5%)を占め、14例(13.2%)に口腔と他臓器の重複癌がみとめられた。舌の重複癌症例は14例中9例であり、そのうち5例が舌と食道であった。5例はいずれも男性で、年齢は48-74歳(平均64歳)、主訴は5例とも舌の疼痛で食道癌の臨床症状はなかった。全例に毎日飲酒・喫煙習慣があり、特に喫煙指数は600-1400と高値を示していた。舌癌は stage I および stage II が各1例、stage IV が3例であり、5例すべて外科療法を施行し制御された。食道癌の発見までの期間は、同時が1例、1年未満が2例、1-2年が1例、2年以上が1例であり、5例中4例は進行癌であった。治療は、2例が外科療法、1例が放射線療法中心に行われ、2例は姑息治療のみであった。早期食道癌の1例を除く4例は、食道癌発見後半年から1年前後に死亡した。